

教育を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

対談の相手は澤地久枝、吉村昭、野坂昭如など十二名であるが、ここではその一人保阪正康との対話「指揮官たちは戦後をどう生きたか」を取り上げる。

ここでいう指揮官とは、大東亜戦争中の日本軍の指揮官たちである。たとえば航空隊の隊長であった美濃部正は、本部の作戦会議で特攻隊に反対する。特攻隊とは、飛行機に爆弾を積んで、敵の船に体当たりをするのである。当然美濃部は当時の空気から「勇気がない」と非難を浴びる。しかし節をまげない。

美濃部は大戦後は自衛隊を経て農業に従事し、晴耕雨読の日々をおくる。

戦時中、南方のマーシャル群島のウォッセ島の警備隊司令をしていた吉見信一は、三千数百名いた部下の半数近くを餓死などで失う。たぶんその責任を痛感していたのであろう。戦後51歳で慶應義塾大学の医学部に入学し、卒業後なり手の少ない貨物船の船医になり、91歳まで現役の医

者を勤める。

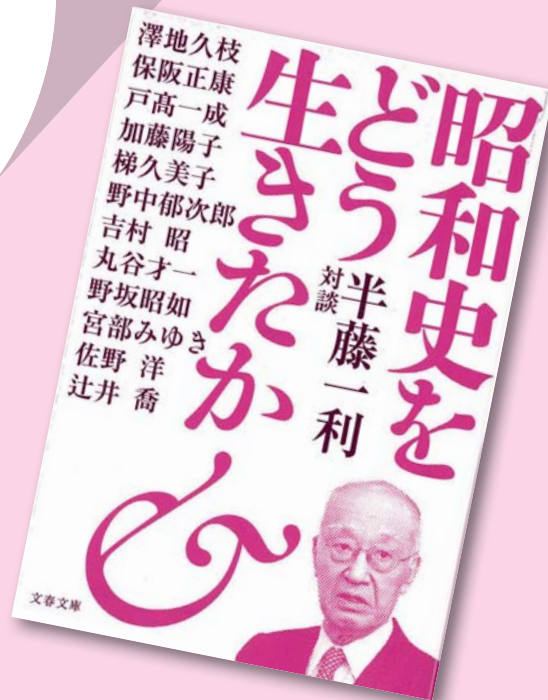
また戦時中潜水艦・伊168号の艦長であった田辺弥八は、アメリカの空母「ヨークタウン」に魚雷二本を命中させて撃沈し、駆逐艦「ハンマン」も魚雷一本で沈める。勇猛果敢な艦長田辺も、敗戦後は穏やかな言葉数の少ない紙屋になる。

同じく潜水艦・伊26号の艦長をしていて、アメリカの空母「サラトガ」に魚雷攻撃で致命傷を与えた長谷川稔は、戦後神奈川県藤沢高校の数学の先生になる。生徒からは「艦長」のあだ名で慕われる。

このほかに本文中では大戦中の連合艦隊司令長官であった山本五十六

『昭和史をどう生きたか』

半藤一利対談 文春文庫 本体 700円+税



と、総理大臣近衛文麿^{ふみまる}のエピソードが紹介されている。対米戦争直前の昭和16年9月、総理が米国大統領ルーズベルトと首脳会談を考えていたときに、総理が山本を呼んで尋ねた。「もし戦争になったらどうなるか」山本が答えた。「一年や一年半は暴れてみせますが、それ以上は分かりませんから、どうぞしっかりと和平を結んでください」

不幸にして対米戦争は始まり、山本の言葉通り当初は日本の勝利が続いたが、4年後に敗戦を迎える。山本も戦死する。

タイトル通り、本書は大戦中の指揮官たちの戦後の姿を追って興味深い。